上：昭和３０年代の接木作業写真（芦沢農園提供）

左：竹田喜博さん（育苗畑にて）

大切なのはニーズの把握と品質保持

農園の年間生産量は7万本～8万本、作付面積は約2ヘクタールである。昭和三十五年に桑畑を台木畑に転換し、ぶどう苗木生産を拡大してきた。

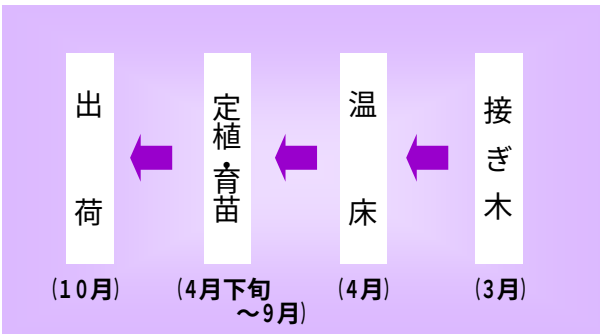
ぶどうは本来発根の容易な植物なので、当時は品種を直接地植えして自根で栽培していた。しかし現在は、ぶどうの根に甚大な被害を与えるフィロキセラ（根に寄生するアブラムシの一種）に抵抗を持った台木に接ぎ木して育苗されるようになった。

生食用とワイン用の生産割合は、2対1で、全国の種苗業者やワイナリーからの委託栽培が多い。受注生産であるため栽培品種は年によって変化する。経営の安定には消費ニーズの把握と品質保持が欠かせない。今後、県内ワイナリーとのコラボレーションにより、県産ワインの品質向上に一役買えたらという思いも語ってくれた。

穂木から新芽が出る。9月ごろまで苗木を育てる。

生産したい木（穂木）を台木に接ぎ木し定植。

病害虫に強い台木を育成。



出荷前のぶどう苗木

ぶどう苗木の里 伊佐沢（いさざわ）

台木畑

人知れず息づくお宝産地

果樹大国やまがたの秋の果物といえば、「ぶどう！」と答える方が多いのではないか。それもそのはず、ぶどうはさくらんぼに継いで産出額が高い園芸作物で、山形県は全国3位の生産量を誇っている。

その、ぶどうの生産に欠かせないのが、〝苗木〟である。実は、苗木生産を行う都道府県は意外に少ない。主な産地は、山形、山梨、岡山、福岡で、山形県の全国シェアは6割も占めているといわれている。まさに山形の地域性が育んだお宝産業なのである。

山形県南部の米沢丘陵に位置する長井市伊佐沢は、ぶどう苗木生産が盛んな農村地域である。昭和三十年代、養蚕に替わる産業として導入されたのが、この地域のぶどう苗木生産の始まりということである。

転作需要に沸いた昭和年代は、伊佐沢でぶどう苗木生産を行う農家は多くいたそうだが、現在でも4戸の農家が生産を続けている。

祖父の代からぶどう苗木生産を継承し、現在では、生食用のほか、ワイン用ぶどう苗木の生産販売を手掛ける竹田喜博さんにお話を伺った。